THE EFFECTS OF JUDO PARTICIPATION ON CHARACTER TRAITS

David MATSUMOTO 1),
Jun KONNO 2) and Hyoung Zoo HA 3)

Abstract
Despite the fact that one of the common beliefs of judo is that it helps to build character, there is no evidence in the scientific literature that this is actually the case. This study addresses this void by examining the relationship between judo participation and character traits such as self-control, emotion regulation, sincerity, courage, discipline, and respect. Over 160 American judo participants completed measures designed to assess their levels of participation and these character traits. Judo participation was positively correlated with these traits, even after the effects of significant demographic variables had been statistically removed. This finding is the first to document the positive effects of judo on these specific character traits.

Key words: judo, character traits, respect, sincerity, courage, self-control

抄録
柔道に関してよく掲げられている信念のひとつに、柔道は人格形成に寄与するというものがあるが、実際にそれを実証する学術的文献は今のところ存在しない。本研究はこのような先行研究の不備を補うため、柔道の実践が、自己統制、情動制御、誠実、勇気、規律、敬意などにわたる人格特性と関連するかを検証した。アメリカ人柔道実践者、約160名を対象に、これらの人格特性、ならびに柔道実践の程度を測定する質問紙調査を実施した。柔道の実践とこれらの人格特性とは正の相関が示された。年齢の影響を統計上取り除いたうえでも同様の結果が得られた。本研究は、これら特定の人格特性における柔道の効果をはじめて示唆する研究結果を報告したものである。

キーワード: 柔道、人格特性、敬意、誠実、勇敢、自己統制

1) San Francisco State University, USA
2) Nihon University, Japan
3) Dong-A University, South Korea
1. 本研究

多くの多くの武道をはじめ、柔道には、哲学的、知的、教育的な、そしてスポーツとしての目的がある。特に「柔道精神の発展の目的は人格形成である」ことがよく言われている。柔道精神は「情勢に適した行動をとること」といった言葉がこれの理念を反映しているといえるだろう。また、こういった哲学的、教育的な柔道の側面は、今日柔道がここまでの世界的に広く浸透してきた大きな理由のひとつであるだろう。このような柔道精神は、柔道のもの技術また競技上の側面と同様、またはそれ以上に柔道の特性として広く捉えられてきた。

しかししながら私たちの知る限り、実際には柔道における柔道実践の効果を記録、報告する先駆先輩の例は極めて少ない。確かに、柔道の生理学的基質、特に競技に関連する生理学的特性等を検証する研究は存在するが、この種の研究ではホルモン等の生理学的反応、また血中乳酸値の変化等に焦点をあてたものが多いと考えられる。それでもなお、試合前の心理的不安などといった心理学的変数に焦点を当てた研究もいくつかあるが10, 11。それらは柔道界がこれまで掲げてきたその哲学的、教育的理念において柔道の実践が実際有用であるかという問題に関しては、及んでいない。

事実、これまで出版された論文のうち、こうして9論文が、直接的にこの問題を取り組んだものではないものの、この問題に関連する研究結果を報告している。このうち5論文は精神発達、視覚、感情障害などの発達障害を伴った児童を対象とし研究したもので12, 13。これら全ての論文は、柔道の肯定的な効果を認める報告をしている。その効果は適応、対処能力、精神不安、自尊感情、心身の健康、身体イメージ、不安削減、社会的態度、対人関係、健康体力などの領域に及ぶとされる。次第の3論文は柔道実践と攻撃性との関連性を検証したものである14, 15。これらの論文はそれぞれ異なった結果を報告しており、柔道実践と攻撃性の無関係性を報告するもの、柔道をすると攻撃性が減少するとする柔道実践と攻撃性間の負の相関を報告するもの16。およそ、柔道を長くすればするほど攻撃性の増加が抑制されるとする柔道と攻撃性の正の相関性を報告するものに分かれる。

最近の研究として、MatsumotoとKono17は、柔道を実践するアメリカ人青少年90名を対象とし、心理的健康度、生活の質レベル、生活満足度を測定した。柔道実践に関しての測定には、年齢や性別などの個人の属性に関する質問項目に加え、スポーツ参加意欲度を測定する尺度として信頼性、妥当性が確認されているスポーツ関心尺度 (Sport Commitment Measure : SCM) が用いられている。結果、性別や年齢などの影響を統計処理するにしても、柔道の実践と心理的健康度、生活の質レベル、生活満足度には有意な正の相関関係があったと報告している。

こういった現況を踏まえ、先行研究において著しく欠けているのは、柔道の実践がその理念とする人格形成と本質的な関連するのかの検証、特に通常の青少年や成人においての実証である。確かにMatsumotoとKono17の研究は、こういった研究に近づくものではあるが、人格特性に関連すると思われる属性については検証していない。このような道徳的人格形成におけるスポーツ参加の有用性については、柔道以外の他の競技やスポーツに参加する青少年を対象とした研究を通じて、数多く報告されている18, 19。柔道の中心的な目標がこのような道徳的特性・人格の成長、完成であると指摘していることを踏まえると、人格形成におけるスポーツの有用性という分野の研究において、まことに柔道こそ、その有用性が検証されるべきである。

では、柔道実践の結果として形成されるはずの人格特性とは何であろうか？確かに、そういった特性や価値何であるかを正確に特定した先行研究は存在しない。しかし、柔道実践と人格形成との関連性を実証的に検証するためには、個人レベルにおいて心理的にこの人格特性を操作的に定義しておく必要がある。様々な可能性は明らかにあるものの、本研究の目的のためには、ここではその人格特性を、自己統制 (Self-Control)，規律 (Discipline)，誠実 (Sincerity)，敬意 (Respect)，
MATSUMOTO：アメリカ人柔道実践者の人格特性に関する研究

自尊感情（Self-Esteem）、情動制御（Emotion Regulation）、勇敢（Courage）と操作的定義した。これらの特性を選び理由は、柔道実践による心理的効果の強さに関する特徴であると思われるためである。もちろん柔道実践によって影響をうける特性が他にもあるかもしれないが、これらの特性が柔道の持つ特性であるかもしれない。これらの特性については個別に考察して述べる。

したがって本研究の目的は、柔道実践者が柔道で如何に何を実践するかを調査によって検証することである。

II. 方法

1. 被験者

被験者は、地域の柔道プログラムに参加するアメリカ人166名（男性81名、男性85名）：年齢範囲は7-64歳、年齢中央値は約17歳）であった。被験者は計8つの州から調査に参加した。参加者数は多い州はカリフォルニア州（89名）、ミシガン州（26名）、アイダホ州（21名）、ニューヨーク州（15名）であった。自己報告による人種は、白人（74名）、アジア系（34名）、ヒスパニック系（14名）、アフリカ系（1名）、その他（17名）、無回答（4名）であった。このうち74名は柔道初心者であり、残りを柔道経験年数中央値を18ヶ月とする長期間経験者であった。柔道練習時間は一週間に14.5時間であり、平均柔道段級位は6級であった（米国では段のランクは11級からはじまる）。

2. 測定項目

1）柔道の実践：柔道の実践の測定には、スポーツ関与尺度（Sport Commitment Measure; SCM）（13項目）を用いた。SCMはスポーツ参加意欲を4レベルから測定するもので、各レベルは、喜び（Enjoyment）（4項目）、社会的拘束（Social Constraints）（3項目）、参加性（Involvement Opportunities）（3項目）、参加意欲（Commitment）（4項目）から成る。SCMはスポーツ心理学の分野で広く使用されており、特にアメリカ人青年を対象として、高い信頼性、妥当性が多くの実証研究で検証されている。Commitment（参加意欲）は参加の必要に対する心理的欲求、その決定を測定し、Enjoyment（喜び）は自身のスポーツ参加に対する全般的な評価感情を測定する。

Involvement Opportunities（参加機会）は直接的な目的ではないものの、参加することによって間接的に得られる価値等（例えば、友情の構築や維持など）に対する評価を測定する。Social Constraints（社会的拘束）は社会的規則・期待がもたらす参加参加に伴う義務を本人がどの程度感じているかを評価する。

III. 结果

柔道の実践は、上記のSCM以外によっても評価した。質問項目は、柔道経験年数（月・年数）、柔道の段級位（帯の色）、一日あたりの柔道の実践時間、週出場大会レベル（出場経験のある出場大会レベルは以下の分類を用いて選択することによって回答された大会出場経験無し、地方レベル（大学出場、地域レベル大会出場、全国レベル大会出場、世界レベル大会出場）であり、これらの質問項目は、年齢や性格などを問う個人に関する質問紙上に加えられた。そしてこれらの柔道の実践に関する質問項目得点を主成分分析した。共通性の推定値には重相関係数R²が使用され、その結果1因子が抽出された。したがって、これら質問項目得点は標準化され、次にそれらの平均値を算出して柔道実践総合得点（Aggregate Judo Participation score）とした。つまり、柔道の実践に関する得点は、柔道実践総合得点（1得点）とスポーツ関与尺度（SCM）の各領域得点（1得点）からなる合計5得点によって構成されている。

1）人格特性：ここでは述べる必要がほとんどない。
柔道の思結として信じられてきた人格特性をここでは、情動制御、勇敢、誠実、敬意、規律、自己統制、自尊感情を捉えた。したがって、10項目から構成されるRosenberg自尊感情尺度を用いた。Rosenberg自尊感情尺度は一般に広く使われている尺度で、それぞれの項目は4段階評定（1=Strongly Disagree・全くそう思わない、2=Disagree・そう思わない、3=Agree・そう思う、4=Strongly Agree・非常にそう思う）により回答される。逆転項目5項目を処理したのち各項目得点の平均値を算出した。

情動制御の測定には、Matsumotoらの作成した国際適応尺度（Intercultural Adjustment Potential Scale：ICAPS）の下位領域であるEmotion Regulation：ER（11項目）を用いた。情動制御力は自己統制力の一部であると考えられ、ICAPSはこれまで数多くの武道修行者の情動制御能力の測定例に用いられてきた。よって本研究でもICAPSの下位領域、情動制御の使用を妥当であると考えられる。各項目は7段階評定（1=全くそう思わない、2=どちらともいえない、3=非常にそう思う）により回答される。逆転項目6項目を処理したのち各項目得点の平均値を算出した。

勇敢、誠実、敬意、規律などにわたる人格特性の測定には、California Psychological Inventory（CPI）とNeo-Five Factor Inventory（Neo-FFI）から選出された質問項目を用いた。自己統制の2つの測定尺度としての項目もこの中に含まれる。計47質問項目が上記の尺度から選出され、これら質問項目は“そうでない”か“そうだ”的2項選択法によって回答された。各測定尺度の最終質問項目は次の手順にて選出した。質問項目は各測定尺度（人格特性）ごとに分類され、各測定尺度内における各項目の選択数をもとに5項目を最終質問項目から選出した。結果、誠実には12項目、敬意には13項目、規律には11項目、自己統制には5項目、勇敢には5項目が最終項目として選出された。逆転項目を処理した後、これらの最終質問項目の得点を各尺度ごとに平均し、各尺度の得点を算出した。

3）個人に関する質問項目：被験者は、年齢、性別、人種といった個人の属性に関する質問項目と前述した柔道関係する質問項目に加え、学年、学業成績点（Grade Point Average system：GPA）などのに関する質問に回答した。

3. 手続き

本研究でのデータは、印刷された質問紙と、オンライン上のでの質問紙の2方法によって回収された。印刷された質問紙のデータ（N=103）は、アメリカ全国にわたる地域柔道クラブの指導員の協力を通じて各クラブの所属者から回収された。この場合、質問紙は無作為に配列された4通りのものから構成される。被験者は自主的に本調査に参加し、回答された質問紙は指定された住所に郵送された。オンライン上で回収されたデータ（N=63）は、米国柔道連盟のホームページ上に掲載された電子質問紙によって回収された。本調査に関する情報を、生徒に紹介するよう要請した掲示板が全国の柔道指導員に届けられた。また、この電子質問紙の内容は上述した印刷された質問紙と全く同様のものであり、回答者は無作為に選出された4通りの質問紙のうちいずれかのものに回答した。なお、本調査における全ての質問紙は匿名で実施された。

III. 結果

1. 基礎統計値と尺度の妥当性

Table1は全変数に関する平均値と標準偏差、Cronbachのα係数を表記したものであり、これらすべての値は既存の文献を対象としたものである。また、柔道の実践と人格特性に関する各変数間相関を算出したところ、予測される傾向内で中程度の相関関係が示された。この結果より各尺度の構成概念妥当性が推察される。一方、自尊感情に関してはこれらの傾向や結果は得られなかった。これに関しては後述する。

2. 柔道実践と人格特性

Table2は、柔道の実践が人格特性と関係するか否かの検証結果を記したものであり、柔道の実践に関する変数（5変数）と人格特性に関する変数
### Table1 柔道参加と人格特性尺度間の相関係数

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>Mean</th>
<th>sd</th>
<th>Aggregate Judo Participation</th>
<th>SCM-SC</th>
<th>SCM-SE</th>
<th>SCM-SC</th>
<th>SCM-IO</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Aggregate Judo Participation</td>
<td>.78</td>
<td>.433***</td>
<td>.093</td>
<td>.158*</td>
<td>.155*</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>SCM Sport Commitment (SC)</td>
<td>4.61</td>
<td>1.13</td>
<td>.92</td>
<td>.532***</td>
<td>.009</td>
<td>.371***</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>SCM Sport Enjoyment (SE)</td>
<td>5.23</td>
<td>.96</td>
<td>.96</td>
<td>-.147*</td>
<td>.522***</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>SCM Social Constraints (SC)</td>
<td>1.47</td>
<td>.87</td>
<td>.69</td>
<td>.048</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>SCM Involvement Opportunities (IO)</td>
<td>4.95</td>
<td>1.19</td>
<td>.81</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>Mean</th>
<th>sd</th>
<th>ICAPS ER</th>
<th>Rosenberg Self-Esteem</th>
<th>Self-Control</th>
<th>Discipline</th>
<th>Respect</th>
<th>Sincerity</th>
<th>Courage</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>ICAPS Emotion Regulation (ER)</td>
<td>4.74</td>
<td>.88</td>
<td>.74</td>
<td>-.358***</td>
<td>.331***</td>
<td>.234***</td>
<td>.287***</td>
<td>.272***</td>
<td>.454***</td>
</tr>
<tr>
<td>Rosenberg Self-Esteem</td>
<td>1.91</td>
<td>.60</td>
<td>.89</td>
<td>-.325***</td>
<td>.254***</td>
<td>.399***</td>
<td>.219**</td>
<td>.271***</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Self Control</td>
<td>5.71</td>
<td>2.22</td>
<td>73</td>
<td>.512***</td>
<td>.643***</td>
<td>.551***</td>
<td>.426***</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Discipline</td>
<td>5.62</td>
<td>2.73</td>
<td>.70</td>
<td>.523***</td>
<td>.544***</td>
<td>.232***</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Respect</td>
<td>8.37</td>
<td>2.97</td>
<td>.66</td>
<td>.640***</td>
<td>.351***</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Sincerity</td>
<td>6.90</td>
<td>2.64</td>
<td>.60</td>
<td>.353***</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Courage</td>
<td>2.48</td>
<td>1.48</td>
<td>.58</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

*** 相関係数の有意水準 p < .001（片側検定）。
** 相関係数の有意水準 p < .01（片側検定）。
* 相関係数の有意水準 p < .05（片側検定）。

### Table2 柔道実践と人格特性尺度間の相関係数

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>ICAPS Emotion Regulation</th>
<th>Rosenberg Self-Esteem</th>
<th>Self Control</th>
<th>Discipline</th>
<th>Respect</th>
<th>Sincerity</th>
<th>Courage</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Aggregate Judo Participation</td>
<td>.143*</td>
<td>.033</td>
<td>.061</td>
<td>.185**</td>
<td>.068</td>
<td>.099</td>
<td>.101+</td>
</tr>
<tr>
<td>SCM Sport Commitment</td>
<td>.224**</td>
<td>-.101</td>
<td>.051</td>
<td>.216**</td>
<td>.058</td>
<td>.106+</td>
<td>.202**</td>
</tr>
<tr>
<td>SCM Sport Enjoyment</td>
<td>.185**</td>
<td>-.092</td>
<td>-.044</td>
<td>.150*</td>
<td>.015</td>
<td>.060</td>
<td>.006</td>
</tr>
<tr>
<td>SCM Social Constraints</td>
<td>.287**</td>
<td>.127+</td>
<td>.152*</td>
<td>.092</td>
<td>.122+</td>
<td>.101</td>
<td>.261**</td>
</tr>
<tr>
<td>SCM Involvement Opportunities</td>
<td>.050</td>
<td>.018</td>
<td>.084</td>
<td>.020</td>
<td>.054</td>
<td>.054</td>
<td>.057</td>
</tr>
</tbody>
</table>

** 相関係数の有意水準 p < .01（片側検定）。
* 相関係数の有意水準 p < .05（片側検定）。
+ 相関係数の準有意水準 p < .10（片側検定）。

-21-
7) 人間の間のPearson相関係数を計算したものです。

この結果、家庭の相関係数は変数として少なくとも1
変数は、親子関係（ICAPS）、自己責任、規律、
勇気などの人格特性変数と有意に相関を示しました。
また、柔道実践に関係する変数のうち最も低いものは、
尊敬または誠実と有意関係（p<.10）を示し
た。これらの相関関係は全て予測される方向で得
られ、柔道実践総合得点、喜び・Enjoyment（SCM）、参加機会・Involvement Opportunities（SCM）、参加意思・Commitment（SCM）とで
は正の相関、社会的拘束・Social Constraints（SCM）とでは負の相関が示された。なお、社会的拘束・Social Constraintsは、社会的規範や圧力
によって感じる柔道をする義務を満たしたもの
であり、Social Constraints間の相関観察された負の相
関は予測された傾向である。これらの結果は柔道
の実践者が、より優れた情動制御、自己責任、規律、
尊敬、誠実、勇気、などといった人格特性と関連
することを実証したものである。

年齢、性格、人種などといった個人に関する変
数が上記の研究結果を変数するかを検討するため、
これらの変数と7つの人格特性に関する変数間の
関連性を分析した。その結果、年齢は人格特性を
測定した尺度と正の相関があることがわかった。
つまり、年齢が高くなるほど、これら人格特性に
おいて比較的高い得点を獲得していた。したがっ
て、Table2で明らかにした分析結果が年齢によっ
て影響された可能性を除去するため、Table2の相
関分析を、年齢の影響を取り除く為および再検証
した結果、Table2で報告された有意の10相関関
係のうち、7相関関係は年齢の影響を除いた後で
も有意であり、1相関については有意傾向（p<.10）
を示した。以上の分析結果は、年齢の影響を取り
除いた上で、柔道の実践が一連の人格特性が関
与することを実証したもののである。

IV. 考察

本研究結果は、柔道の実践が、人格特性（情動
制御、自己責任、規律、勇気、尊敬、および誠実）
と関係することを明らかにした。柔道を長く行っ
ている柔道実践者は、これらのポジティブな人
格特性を備えていることができた。年齢、性格、
人種といった変数のうち、年齢はこれらの人格特
性と有意に相関していたため、柔道実践と人格
特性の相関関係において年齢の影響を検証を除
いてもなお、これらの相関関係は有意なもので
あった。

しかしながら、本研究結果の解釈にいくつかの
限界があり、特に人格特性の測定に使用された尺度
の性質等に関しては言及しておきたい。前述し
たように、柔道実践に関連した「人格」にはどのような特性があるのか、正確に特定している先行研
究は存在しない。加えて信頼性・妥当性が確認さ
れた人格特性尺度の類はこれまでにおいていなかった。したがって、本研究ではこれら人格特性を
測定するため、著者は独自の尺度を分析した。
確認までだが、これら独自に作成した人格特性尺度
には高い内部整合性による信頼性（α係数）、ま
た各尺度間の相関を推定される構成概念妥当性
も得られている。しかしながら、こういった尺度
使用による研究結果は予備的結果であるといえる
であろうし、さらに今後のこれら人格特性を測定
する尺度の使用までその検証の必要性はいうまでも
ない。柔道に関すると見たされる人格特性を広範囲に満たすことがますます必要とされている。
加えて、本研究で使用された尺度はすべて自己報告
式質問紙によるものであり、柔道の実践者が実際に
これらの人格特性に行動・態度のレベルで関与す
るかの検証もまた必要であろう。

このように、本研究結果の解釈に限界があるとし
ても、柔道実践により直接関係すると考えられてきた人格特性を実際に検証した本研究結果は、な
お重要なものであり、柔道の実践者が心身の健康、
生活満足、および生活の質と正の相関を示すと報
告したMatsumotoとKonnoによる先行研究を裏
付け、または発展させるものといえる。特に柔道
を長く行っている実践者は高い意欲で柔道により
身を投じており、柔道をより楽しむ実践者は、本
研究で検出した人格特性が高得点を得ていることが
わかった。人格の成長、完成という柔道の有用性
を実践者にもたらすには、柔道実践者の柔道
に対する意欲や喜びといった感情を育成すること

- 32 -
MATSUMOTO：アメリカ人柔道実践者の人格特性に関する研究

が重要である。本研究結果は示唆している。これは柔道の指導に際しての役立つ結果であろう。

また同時に、社会的拘束（Social Constraints）と人格特性間には負の相関がみられた。この社会的拘束（Social Constraints）は、社会の規範や期待によって柔道を続ける資質をどの程度感じているかを評価したものであり、社会の期待や規範のために柔道を実践する個人には、各人格特性上で得点を獲得する傾向がみられた。この結果は、自らの選択、行動によって柔道を実践することが、人格育成の重要なカリキュラムを示唆しているよう。柔道がかつて最初にそうであったように、アメリカや他の多くの諸国では、今日の柔道はいわゆる地域に根ざした“町道場”を介して人々に紹介され、道場に行く行かない、柔道をするしないは個人の判断による。よって、柔道の実践が義務である国（教育制度を通じてなど）、また社会規範や期待が柔道の実践に対して強い影響をもつ国（日本や韓国など）において、これら人格特性がどのように柔道の実践と関係するかを検討することは非常に興味深いか、また、日本や韓国について、柔道が学校教育に取り入れられている柔道環境（柔道の実践が義務付けられているか、柔道の実践が社会的に高く期待される）と、町道場などの民の道場（柔道への参加が個人の自らの意思に基づく）とは、柔道の実践とこれらの人格特性との関係性が、どのように変わってくるかを検証することとも興味深いか。

また、情動抑制、自己統制、規律、敬意、敬意、誠実、といった人格特性で得点を残せる個人は、自尊感情において得点を獲得していた。つまり、自尊感情と本研究で調査した人格特性との間には負の相関があった（Table1を参照）。一般的な自尊感情の概念に戻るようなであるが、これまでの自尊感情に関する研究では、学業など様々な行動学的な領域で、個人の自尊感情のレベルは実際の能力とは関係しないとするものが多い35。自尊感情は通常、自分自身を価値あるものとする自己の評価感情であり、個人が自身の無能力さを認識したときに引き起こされる自己認識の役割をすると考えられている。本研究において自尊感情についての傾向は、このような自尊感情の一般的な定義からも解釈できるだろう。例えば言うなら、実際能力の低い人は、自分が価値あるものとする感情を維持するために、高い自尊感情を備えて必要があるかもしれない。一方実際に高い能力を備えた人は、実際の場でも高い能力を発揮するがゆえに、自分が価値あるものとする感情をあえて引き立たせる必要はないのである。

最後に本研究結果によって、柔道の実践がこれからのポジティブな人間特性を引き起こすと直ちに推論されるものではないと確認しておきたい。こういった推論には、柔道の実践前後の人格特性の測定・比較を検査する実験的研究や、柔道の実践量にともなって変化する人格特徴の共変量を検証する研究方法の実施が前提条件である。今後は、このような新たな関係についての研究が期待されるという。この関係については、このように自尊感情の関連が検証されることが望まれる。

V. 結論

本研究では、柔道実践と人格特性の関連について探るため、アメリカ人柔道実践者を対象とした質問紙による調査を行った。具体的には、個人における「柔道精神、練習量」や「参加意欲」など実践に関わる状況を、構成されている尺度から人格特性（自己統制、情動抑制、誠実、規律、敬意、敬意、誠実、自尊感情）を把握し、それらの相関をみた。結果、それらには既に有意な正の相関があることが示唆され、柔道実践が人格形成に寄与する可能性があることが示唆された。

著者注

David Matsumoto（サンフランシスコ州立大学、心理学科 - Department of Psychology, San Francisco State University）；金野一訓（日本大学）；Hyung Zoo Ha（東亜大学 Dong A University）

本研究は国立柔道連盟（USJA）による研究助成を受けている。また本研究は多くの方からの
Reference


34) Costa PT, McCrae RR. Revised NEO Personality Inventory (NEO-PI-R) and New Five Factor

35. Baumeister RF, Campbell JD, Krueger JI, Vohs KD. Does high self-esteem cause better